

# バンコク日本人学校小学部3年生の現地理解教育

前泰日協会学校（バンコク日本人学校）

佐賀県武雄市立東川登小学校 教諭 福田 啓子

**キーワード：交流学習会、打合せ会、事前事後学習、文化交流、スポーツ交流**

## 1. はじめに

バンコク日本人学校の国際理解教育の大きな特色は、海外にある日本人学校ということを生かし、現地校（タイ国の学校）との交流学習が毎年定期的に行われているという点である。本校の前身は1925年（大正15年）に盤谷国民学校として設立されたが、第2次世界大戦のために閉鎖。そして戦後1956年（昭和31年）、日本国大使館の中に大使館附属日本語講習会としてとして再発足された。やがて、1974年（昭和49年）にタイ国の私立学校として正式に認可されると、2年後の1976年（昭和51年）から近くの国立ダラカーム校との交流が始まった。その頃は、主に運動会を交流の場としたスポーツ交流が中心であった。ダラカーム校とは、排日運動が吹き荒れたときにも交流を続け、現在にいたっている。小学部3年生が交流を行う相手校が、そのダラカーム校である。

## 2. 交流学習会の基本方針

- (1) 現地校との交流を通して、児童生徒の現地理解を深める。
- (2) 日頃の外国語学習の成果が表れるような活動を設定する。
- (3) 相手校との打合せ会で情報交換を綿密に行い、より内容のあるものにする。

## 3. 日程

- (1) 日時：平成27年9月15日（火）
- (2) 場所：ダラカーム校
- (3) 人数：ダラカーム校 児童数65人  
日本人学校 児童数418人 学級数13学級
- (4) ねらい
  - ① 現地校の児童に、進んで関わり合ったりタイ語を使ったりする交流を通して、日々の学習を生かす活動となるようにする。
  - ② 現地の学校の同学年児童との交流を通して、異文化を理解し、尊重しようとする態度の育成を図る。
- (5) 内容：開会式、文化交流、スポーツ交流、昼食・ふれあいタイム、閉会式

## 4. 実施に至るまで

実施に当たり、両校の教職員による打合せを行った。本校小学校部の交流学習会は、2年を1サイクルとして捉えており、毎ゲスト校、ホスト校を交互で実施している。平成27年度はゲスト校であった。打合せの日程、内容については、本校の各学年部に配属されているタイ語教員に、タイ語による連絡調整役を依頼している。

打合せ会では、交流学習会で使用する会場の確認、開閉会式や交流内容についての検討、交流時のグループ編成、事前交流、職員懇親会を行った。ダラカーム校は、バンコク市内の公立校で、中学年高学年が交流している大学附属の小学校に比して、格段に児童数が少ない。そのため、日本人児童10人に対しダラカーム校児童1、2人というグループ編成にならざるを得ない状況がある。このような中で、いかにねらいの達成に迫る活動にしていかが、中学年の毎回の課題となっている。

## 5. 児童の事前活動

交流学習会に向け、「総合的な学習の時間」の中で事前活動を行った。学年では、交流学習会のスローガン決め、開閉会式の確認と練習、交流校の情報収集を、行った。各学級においては、事前アンケート実施、文化交流練習、名札（ローマ字、タイ語表記）作成、グループカード作成、交流時に用いるタイ語の練習、交流の歌の練習である。これと並行して、代表児童の練習を休み時間に行った。タイ語で挨拶する児童は、保護者がタイ人の家庭の児童を優先して募集し、タイ語教員の指導の下、練習を行った。

## 6. 交流学習会当日の様子

### (1) 開会式

ダラカーム校の教師や高学年児童が、学校入り口から打楽器を鳴らしたりリズムに合わせて踊りを踊ったりして、本校児童を迎えてくれた。開閉会式会場のホールには、タイと日本の国旗が交互に飾られていたり本校を歓迎する垂れ幕があったりした。開会式では両校校長、両校代表児童が挨拶を行った。タイ語、日本語を交えての挨拶に児童はじっと聞き入っていた。記念品交換に次いで、両校の校歌を発表した。ダラカーム校の3年生児童は65人で、本校児童の約7分の1であるにもかかわらず、一人ひとりが大きな声で校歌を歌っていた。その堂々した姿に児童は感心したようであった。日本人学校の校歌発表は、ダラカーム校の校歌発表に触発され、元気な声で歌うことができた。開会式が終わると、ダラカーム校の代表児童が各学級の先頭に来て、次の活動場所へ誘導してくれた。

### (2) 交流活動

交流活動は、スポーツ交流、文化交流の半数に分かれ始めた。それぞれの小グループで自己紹介をし合った後、活動を開始した。

#### ①文化交流

文化交流では、まずダラカーム校の児童にタイの文化を伝えてもらい、トウモロコシの花作りを行った。ストローにたくさんの切込みを入れ、それをもう1本のストローにらせん状に巻き付けることで、トウモロコシの花を表現したものである。切込みは既に入っており、児童はストローを巻き付けるだけでよかったが、それが意外と難しいようであった。作業に苦戦する児童に対し、ダラカーム校の児童が間近で巻き方をやって見せたり、作業の補助をしたりしていた。細かい作業だけに、よく見ないと理解できないこの活動は、知らず知らずの間に日本人学校の児童とダラカーム校の児童の距離感を縮め、また完成したときの喜びを共有することができるものであった。

次いで、日本人学校児童による日本文化紹介を行った。内容は大きな模造紙を折って「かぶと」を作るものである。折り紙が日本の伝統文化であること、完成したかぶとにサインし合うことで交流が生まれ、記念の品になると考えたからである。ダラカーム校の児童1、2人につき、日本人学校の児童が10人というグループ編成の中、少しでも日本人学校の児童がタイの児童と触れ合えるように、折り方の手順を分担して説明することとした。大きな用紙を一緒に折ったり出来上がったかぶとをかぶせてみせて完成を喜んだり、完成したかぶとにサインをし合ったりして、交流が深まっていく様子が見えてきた。日本人学校の児童の中には、ダラカーム校の先生方にサインを依頼する者もあり、タイの人たちとの交流を進んで行おうとしているようであった。



かぶとをかぶって記念撮影する様子

## ②スポーツ交流

スポーツ交流では、ダラカーム校教師が考えた7つの種目（①卵すくい ②輪入れ

③数めくり ④ボール入れ ⑤缶運び  
⑥糸巻き移し ⑦風船割り）を10分ごとに行った。各種目ブースには、高学年児童がいて用具の準備を行っていた。また、3年生担当教員以外の教員、学生が13グループの担当をしており、児童は安心して活動に取り組むことができた。それぞれの種目をダラカーム校の教師やタイ語が理解できる日本人学校の児童がやってみせた後、実際に競技を開始した。競技が協力して行う内容で、グループ対抗だったため、どのチームからも自然に応援の言葉やハイタッチなどが発生し、歓声が至るところで沸いていた。



缶運びが終わって喜び合う様子

## (3) 閉会式

### ①両校による出し物（踊り）の発表

閉会式の中で、互いの文化を発表する活動として、日本人学校の児童は「エイサー」を、ダラカーム校の子はタイの遊びをモチーフにした踊りを披露した。エイサーは各学級から代表児童を募り、踊りやタイ語による紹介を練習してきた。当日、代表児童は、衣装と頭衣（サージ）を身に着け、パーランクー（太鼓）を持ち、沖縄の伝統の踊りであるエイサーを大きな振り付けと真剣な表情で舞った。また、代表児童が、エイサーがお盆に先祖を祀るために踊られる踊りであることを日本語とタイ語で説明したことで、両校の児童のエイサーへの関心が一段と高まった。

次いで、ダラカーム校の発表があった。バナナの葉を使った遊び、ココナッツの殻を下駄にした遊び、つながり遊び、ハンカチ落としに似た遊びなど、昔からタイに伝わる遊びをタイ衣装に身を包んだ児童が音楽に合わせて披露した。鮮やかな衣装で楽しそうに踊る様子に、見ている日本人学校の児童も体を動かしてリズムをとったり笑顔になったりしていた。踊りの内容は、生活科で扱ったものもあり、日本人学校の児童にはタイの遊びについてより深く理解する機会となったようであった。

### ②閉会式

閉会式の中で、ダラカーム校児童代表と日本人学校児童代表の挨拶を行った。ダラカーム校からは、「一緒に遊べて楽しかった」「また、来年会いましょう」という言葉が、日本人学校からは「言葉が通じなくても友達になれることが分かった」「ずっと友達だよ」という言葉が、タイ語と日本語で述べられた。

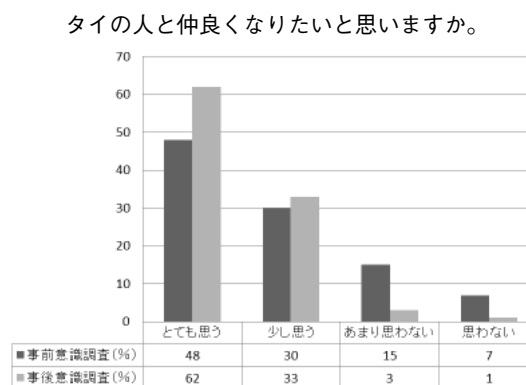
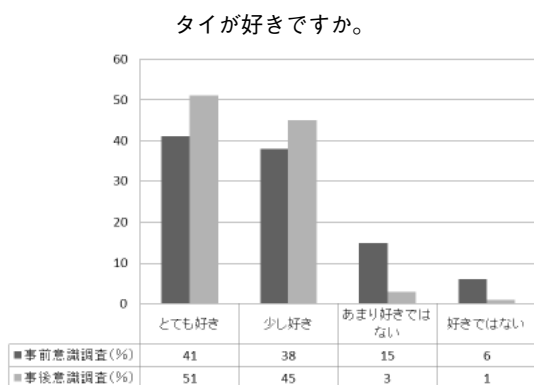
最後に、全員で「思いやりの花」を歌った。1番をダラカーム校の児童がタイ語で、2番を日本人学校の児童が日本語で歌い、最後の部分を両校の児童がタイ語と日本語を交えて歌った。日本人学校の児童は、曲の盛り上がりところで振り付けを付けて曲のイメージをより膨らませた。ホールいっぱいに「思いやりの花」の歌声が響く中、児童は育んだ友情を感じたり別れを惜しんだりした。

## 7. 児童の事後活動

### (1) 感想の記入

帰校後、交流学习会全体を通して、感じたことや思ったこと、自分ができた交流について、新たな発見、新たな疑問などをについて記述させ、振り返りを行った。

(2) 事後アンケートの実施（下表は集計結果）



(3) 当日の様子の写真



グループカード交換



花作りを教えてもらう児童



8. 交流活動を終えて

事前の意識調査では、「タイが好きではない」「タイがあまり好きではない」と回答した児童が、全体の2割近くいた。「タイが暑いから」「汚いところがある」というように、外的環境や意思疎通のしにくさを理由として挙げている児童が多かった。「タイの人と仲良くなりたいか」という問いに対しても、2割近い児童が否定的な回答をしていた。「タイ語が分からないから」「タイの人は怖いから」と、言語での意思疎通のしにくさ、これまでに会ったタイの人のイメージで判断していることがうかがえた。これらの結果を踏まえ、今年度の交流学習会では、タイ語が苦手な児童でも、学習しているタイ語で意思疎通できることに気付かせたり、言葉が通じなくても活動を楽しめたりする内容にすることを意図して計画・打合せを行った。

交流学習会後の意識調査では、「タイが好きではない」「タイがあまり好きでない」と回答した児童が事前調査のときより8割減り、「とても好き」「少し好き」と回答した児童が増えた。事前調査で否定的だった児童も、直

接タイの児童と交流することで、「タイの子はいい子なんだということが分かったので、少し好きになりました」「タイの友達に名前を聞いたりタイのことを聞いたりして、タイのことをもっと調べたくなった」と、これまで抱いていたイメージを払拭したり、身近な存在として再認識したりできたためと思われる。事前調査で肯定的だった児童は、「いっぱい話せたから」「タイの遊びや文化が面白かったから」と、より深いタイ理解ができたことに価値を見出して、事後調査でも肯定的な回答をしたと思われる。

「タイの人と仲良くなりたいか」という問いに対しても、交流学習会後は否定的な回答が7割減った。交流学習会を通して、タイの人の優しさを感じたり一緒に楽しめることが分かったりしたことが要因として挙げられる。肯定的な回答をした児童は感想に、「こうやって1年に1回しかできないけれど、この1日を大切に使うと、楽しいことやうれしいことにつながって、最後は大切な友達になるのだと思いました」「タイの人と学校で交流するのは、1年1回の貴重な時間だから楽しむのも1つだけれど、仲良くするのも大切。3年生では、仲良くするのが大切なのだと思い、タイ語をたくさん使い頑張りました」と記していた。ダラカーム校児童、職員の日本人学校訪問に対する歓迎の意、親愛の情を至る場面で感じ取った児童も多くおり、交流学習会の果たしている役割の大きさがうかがえた。日本人学校は、年度末になると多くの児童が本帰国をし、年度初めに多くの編入児童を迎える。交流学習会は、特に当年度編入した児童にとって、タイやタイの人たちのよさを身を以て知る絶好の機会となっていると考える。

次年度は、交流児童の人数を少しでも増やしてほしいという日本人学校からの要望を受け、ダラカーム校の交流児童が3年生と4年生になることが決定している。今後も、ダラカーム校との交流学習が続いていくことを願っている。